

Title	象徴の後退：言語と実在について
Author(s)	池田, 義一郎
Citation	英文学評論 (1955), 2: 143-157
Issue Date	1955-03
URL	https://doi.org/10.14989/RevEL_2_143
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

象徴の後退

— 言語と実在について —

池田義一郎

一、アテネの盾

高村光太郎氏の歌に「海にして太古の民のおどろきを吾ふたたびすおほ空のもと」というのがある。海をはじめて見たおどろきは私の幼い記憶にもかすかに残っているが、大きくなつてから太古の民のおどろきというようなものを経験したのは山であつた。田舎から東京へ出て間もない頃のこと、中央沿線の秋色をさぐるという同級生のハイキングにつれ出されたことがある。浅川で下車して山道を歩いて高尾山というのにのぼつた。山の寺で一と休みして帰ろうとすると茶店の人が、この先きに景色のいい見晴らし台があるという。そこで何心なく奥の方へ薄暗い林の道を開けていつたが、木立がつきると突然異様なものが眼に入った。見晴らし台の向うに黒々とした山が横たわり、その後から途方もなく大きな白いものがつき出ている。黒い山が相当高い上に、これはまたその何倍も高く、見上げる眼がくらくらするほど遙かな上空へつき出ている。それはただの白さでなく、何か生きものの羽のようなものが無数に重なりあつてじわじわと動いているようで、じつと見ていると何ともいえず気味が悪かつた。大きな白い魔物にうなされていくような気持であつた。

しかし、こうした気持はすぐ解けた。これは富士が六合目あたりからの急角度の部分のをぞかせているので、眼の

前の奥多摩一帯の山との対照からこんなに高く見えるのだとわかつたからである。その後私は長与善郎氏の「竹沢先生と云ふ人」を読んで、これと似たような経験が書かれているのを面白く思つた。竹沢先生夫妻と二人の青年が乙女峠にのぼつて雲にとざされた富士が姿をあらわすのを待つてゐる。すると高い中空に一点の黒い地が見えはじめ。彼等はそこが頭であろうと思つてながめてみると、その黒点の上にたなびく雲のはるか上の方に富士が突然巨きな頂きをあらわす。

「おッ！」先生が思はずかう声を発すると同時に、「まあこはい！」と奥さんは先生のわきにすり寄つた。「妾いやだわ！」 実にそれは此瞬間最も自然なる唯一の実感であつた。かの黒点は漸々その鳩尾の辺にあたつてゐたと知つた時、吾等一同慄然として、少時くは只啞然と蒼顔を見合はずりないのだつた。……

「なんて気味のわるい——うなされてるやうだわ。きつとうなされてよ。妾、今晚。」
奥さんが云つた。

「俺はかう云ふ富士を度々見たことがあるよ。夢の中で。」やつと此方をむいて一太息つくくと先生は云つた。

しかしここでもまた、うなされるような気持は直ぐ消えて先生たちはのん気に北齋なんぞを論じはじめ。彼等は文明人だから頭の中に此の山の概念が出来ていて、それが要するにただの山であり、無教にある地殻のシワの一つにすぎないことを知つてゐる。たまたまそれが不意に「鬼的な面つき」^{デヤニラシ}を見せるものだから、彼等は一瞬慄然とするが、その不気味なものは、すぐまたおさまるべきところ——頭の中に整備された概念の引き出しの一つにおさまつてしまふ。この不気味なものが再び姿をあらわすとすれば、それは彼等の頭が整理のきかない状態にある時、即ち夢の中である。しかし頭の中にこんな便利な整理棚をもたない原始人の場合はどうであらうか。彼等は此の何とも説明のつかぬ不気味なものが眼の前にあるかぎり、うなされる気持からのがれられないだろう。彼等は今日の人が時たま夢の中で経験するような心理状態で、その日その日を暮らしたのである。暗い原始林や底知れぬ青い淵や、そこにすむ獣

や魚は、彼等の眼に動物・植物・鉱物という風に整理されて映らず、何か鬼気をおびてせまつてくる、えたいの知れぬものと感じられたであろう。概念への抜け道をまだ持たない彼等の感覚が、落雷、暴風、日蝕と後に命名される通り魔のような現象にさらされるとき、彼等の気持は今日のわれわれがシュール・リアリズムの絵を見ているより何層倍も昏迷したものであつたにちがいない。人間はどうしてこのような昏迷からぬけ出すことが出来たのだろうか。

C・デイ・ルイスは現代の詩人が現実の「老大な激動する混乱した姿」とどう取りくむかを次のような伝説をひいて説明している。怪物メヅーサを面とむかつて見た人は石にされてしまふ。ペルセウスがこれを殺すことが出来たのは女神アテネの盾を使つたからである。彼は女神の教えに従つて眼を怪物そのものに向けず、盾に映したその像を見ながら突き殺した。人間の眼は「物そのもの」を直かに見ると手も足も出ない昏迷におちいつてしまふ。この呪縛状態から脱して物そのものに対し何らかの自主的な態度に出られるようになるのは、昏迷なしに見ることの出来るイメージをつくり出したときである。ルイスはこれを「現実とよりよく取りくむための現実からの後退」といつている (C. Day Lewis: *The Poetic Image*, p. 99) これは詩人の場合ばかりではない。原始人が夢魔にうなされる状態から脱して、対象世界と取りくむようになつたのも、此の現実からの一歩後退のおかげであつた。彼等の眼が、たえず動く混乱した現実の姿に直かに向けられていくかぎり、彼等は枝にとまつたとんぼが子供の人さし指の回転に眼をまわして身動きが出来ないと同じである。動く現実の代りのもの、静止し固定したイメージ——シンボル形態 (symbolic forms)——整理された記号の世界——を見るようになって彼等をはじめて現実に対し何らかの対策を講じられるようになった。人間の精神が対象世界と取りくんできた長い道は、まさにこの知慧と芸術と戦術の女神がペルセウスに授けた方法の忠実な実行であつたといつていい。

人間がアテネの盾に映した最初のイメージは神話であつた。風神や雷神のイメージがつくられたとき、暴風や雷は悪夢のように襲つてくる、えたいの知れぬものではなくなつた。彼等は現実の暴風や雷におびえていない時でも、固

定したその像を見るようになり、その心意をおしはかる余裕をもつようになった。彼等のつくり出した神話的イメージは当然彼等に最も身近かなもの即ち人間社会の投影であつたから、神々も人間に似た心意をもつものと考えられた。これは、えたいの知れぬ不気味なものが、一定の形を持つた、そして話しようによつてはわかる相手にかわつてきたことを意味する。こうして儀式(ritual)や呪術(magic)が生れた。現実から一步後退した象徴に拠ることになつて、彼等ははじめて現実に向つて何らかの手をうつ余裕を得たのである。

しかし人間が儀式や呪術のあまさを悟つて、自然の諸力との積極的な闘争に入つていくとき、アテネの盾に映す象徴は現実からさらに二歩も三歩も後退しなければならぬ。呪術から原子力科学にいたる道程を象徴の面から見れば、イメージから抽象へ、実体から属性へとたえず現実の生ま生ましい姿から後退していくことであつた。暴風が、その猛威をまざまざとあらわした風神のイメージにとどまつているかぎり、人間はその本質にせまることは出来ない。風神とよりよく取りくむためには神話的イメージは単なる自然現象をあらわす「風」という概念記号にかえられなければならない。さらに人間がこの風に科学的メスを入れるとき、風という言葉の具象性から生れる稀薄なイメージやかすかな情感さえも不純な爽雑物として除かれ、流体の速度とか気圧の高低というような純粹な抽象的記号として取りあげられなければならない。これは感覺の世界を遠くはなれた無色透明な数字と論理関係の世界である。人間はここまで後退して、はじめて暴風と有効に闘うことが出来る。同様に「病」という苦悩の連想をともなう感性的な象徴から、体温三七・二、脈搏一一六、呼吸数一八、血圧一一六というような非情の数字の象徴に退いて、人間ははじめて冷静適確に病と取りくむことが出来る。

カシラーのいうように人間は物そのものを見ずに象徴を通して見る「象徴的動物」(symbolic animal)である。この象徴は科学技術の進歩につれて必然的に物そのものから後退しなければならない。山を木花咲耶媛というような美しい女神の神体と見ていた古代人は、まだ自然と神の近くに生きていた。現代の経済的人間の眼から見た山は一塊

の資源で、高さ何米、面積何平方軒、鉞物理蔵量何噸等という風にあらわされる。彼等はこのような象徴をアテネの盾に映し出して、それをたよりに科学技術の武器を容しやなく山神の神体へうちこむのである。自然の姿は昔とかわらないが、人間の眼は直かにそれを見ず、いつも象徴を通して見るのだから、象徴が後退すれば自然の形も色もうすれていく外はない。虹も月も星も相かわらず美しいが、われわれにはどこまでも自然の物理的現象としか映らず、それ以上の神秘的な夢にわれわれを引き入れる力はない。昔の自然のアニミスティックな魔力や生彩は、われわれが原始人や小児の心理状態に戻らないかぎり永久にかえつてこない。「地上から光輝は去つた」とワーズワースは *Intimations of Immortality* で歌つてゐる。

There was a time when meadow, grove, and stream,

The earth, and every common sight,

To me did seem

Apparelled in celestial light,

The glory and the freshness of a dream.

It is not now as it hath been of yore;—

Turn wheresoe'er I may,

By night or day,

The things which I have seen I now can see no more.

人間の信仰も多彩な個性的な神々から眼に見えぬ普遍的な一つの神へ、さらに抽象的な宇宙の法則性とかライフ・フォースというようなものへかわつていく。文字も絵言葉から象形文字へ、それから単に音を表わすだけの記号へとかわ

わつていく。言葉もイメージの多いメタフォリカルな表現から分析的抽象的表現へとかわつていく、これは人間が無知の幸福に足ぶみをしていないかぎり免れ得ない運命である。

二、言語と地図

現実は限りなく豊富で複雑で常に流動している。これを定着し整理して、われわれが現実には直かにふれるときに感じる昏迷なしに、対象を扱えるようにするのが象徴の役目である。これは現地と地図を対照すればよくわかる。現地を歩いて得られるのは様々な個物の混雑した印象である。山や丘陵や森や原や人家が区切りなしに続き、それらの対象は眼を近よせるほど一つ一つが限りなく複雑さをあらわしてくる。そこで眼を現地から地図に移すと、それらの雑然とした個物の様々の形や色は消えて全体の地形が浮び上り、重要箇所的位置が一目ではつきりとわかる。言語についても同様のことが考えられる。たとえばわれわれが病気で寝ている人を見舞ったとき、われわれの心をかすめる印象はきわめて複雑である。何時何処でどういう様子で寝ていたかという四囲の状況から、病人の顔にあらわれた苦痛の表情、それに対するわれわれの同情とか健康者の優越感とか様々の心理の起伏、これがいわば現地である。言語ではこれを簡単に要をとらえて“*The man lies ill.*”とあらわす。これは一見当り前のことしか思われないが、現実の複雑なディテイルをここまで濾過するようになるには、人間は必須なものを必須でないものからよりわけるといふ抽象化の長い訓練を経なければならなかつたのである。今でも未開人の言語は眼の前の現実の複雑さを、こんなにも手際よく整理出来ない。アメリカ・インディアン族の Kwakiutl 族の言語は、英語で“*The man lies ill.*”とこのことを次のように具体的にしかいえない。“*This-visible-man-near-me, I-know, lies ill on his side on the skins in the present house near us.*” (Mario Pei: *The Story of Language*, p. 121) これは幼児の言葉のまわりくどさを思わせる。より複雑な印象をうける筈の大人の言葉は、「病臥」という風に必要な核心だけをあらわすが、子供の

言葉は「きいきいがいたいから、おうちでおふとんにねんねしている」というような具体的表現をとる。しかしこれでも現実の印象の非常な整理であることはいうまでもない。言語というものは、そもそも最初から「よりわけ」(sorting)であり、抽象化なのである。(意識の流れをそのままに写したという「ユリシーズ」のマリオンの独白すら、既に分のよりわけと整理を経たもので、人間の実際の心理的現地はもつと取りとめのない、散発的に浮き上る泡のようなものである。その底流として動いているのは、無意識に働いている身体中の全細胞のかもしれない出ず気分——いわば深い低音部の伴奏のようなものでこれを言語でとらえることは不可能と思われる。)そして子供が大人になり、原始人が文明化するほど、現実はより複雑な相をあらわしてくるから、「よりわけ」はよりきびしく、言葉はより簡単にならざるを得ない。生活や思想が複雑化すると言語構造がかえつて単純化するのとは必然の成り行きで、もしこれが並行的に複雑化していつたら、*confusion worse confounded*で拾収がつかないことになるだろう。

地図には現地を低い上空から見おろした殆んど絵に近い詳図と、高い上空から見た略図とがあるように、言語にも一つ一つの個物をあらわした固有名詞と、多くの個物を類によつて一色に塗りつぶした類名詞がある。個々の人間はそれぞれ固有名詞で呼ばれ、その数は過去現在を合わすと文字どおり「億兆」であろうが、類名詞はそのすべてを「人」の一語であらわす。地上無数に存在する木や鳥は同類を一括した共通の名で呼ばれ(稀に人間に密接な関係をもつたものが固有名詞で呼ばれることもある)、これらの類名詞も種・属・科・目という風に段々上位の概念に包括され、さらに「植物」「動物」から「生物」という広い類名詞に一括される。しかし未開人はこゝまで「抽象のハシゴ」をのぼることが出来ない。ブラジルの Bakairi 族は彼等の「おうむ」や「しゆゝ」に一々固有の名前をつけているが、“parrot”や“palm”に相当する類名詞を知らない。タズマニアの原住民の言語にはゴムの木の各種類にそれぞれの名があるが“tree”に相当する語がなく。(Jespersen, *Language*, p. 429)

こうした未開人の言語と文明人の言語との対照から人間の言語の進化過程を考えると、原始時代の言語は感覚が物

そのものにふれて発する間投詞や間投詞的な歌であつたが（間投詞は品詞のうちで最も起原が古く動物語に近いものである）、これが対象のイメージと結びついて固有名詞になり、固有名詞がアナロジイで同類のものに拡大されて類名詞にかわつていつたと思われる。（cf. Jespersen, *Language*, p. 440; *The Philosophy of Language*, pp. 66-67）このような言語の進化過程は、対象世界に向けられた人間の精神の進化過程に対応するものである。人間の前には老大な混沌とした物そのものの世界——人間の知性によつてまだ整理されない世界——がある。人間はうなされるような昏迷なしにそれを直かに見ることは出来ない。そこで人間は物そのものの世界と自分との間に象徴の膜を張つて、それを通して整理された世界を見ることになる。はじめこの膜は生まましい實在に近く、個物の姿を一々まざまざと映しているが、やがてその上層に、同類の個物を重ね合わせていくつかの群に整理した膜が出来、さらにその上層に、多くの小さい群を少数の大きな群に統合した簡略図が出来、しまいは個物の形も色もすべて塗りつぶした稀薄な抽象図が出来る。人間はこのようなくつもの膜をレンズのように使つて、あるときは近く狭い視野に、あるときは遠く広い視野に焦点を合わせて対象世界をながめる。こうして複雑な實在世界の整理像としての言語は、實在世界により近い具象語を基盤として、段々により高度の抽象語にのぼつていくピラミッド形の構成層をもつことになる。人間は文明化するほど、このピラミッドの上層にのぼり、未開人は低い層にとどまつている。未開人の言語は實在のまだ分化されない混沌の姿に近く、それを反映して構造は複雑で絵画的である。そして言語が進化するほど構造は簡單になり論理は明晰になるが、それだけ色彩のあせた稀薄なものになつていく。つまり現実の混沌とした生まましい姿から遠のいていくわけである。

このように實在世界からたえず後退して稀薄になつていく象徴をうち破つて、再び物そのものの世界に直かに觸れ、そこから新しいイメージをつかみ出そうとするのが今日の芸術の一つの行き方であろうと思われる。山を描くにも、概念によつて整理された山を描くのでなく、概念以前の生まの感覚で山にぶつつかり、山の魔にふれた原始人の

味つたであらうような、うなされるような感動を伝えようとしているように見える。シュール・リアリズムの絵や彫刻が夢の中でわれわれの経験するような混乱した感じや不気味なイメージを描くのも、文学が意識の流れや潜在意識の未分化の状態をとらえようとするのも、現代詩が新しいイメージをつくり出して化石化した言葉に新しい生命を吹きこもうとするのも、要するに今われわれを包んでいる抽象化した象徴の膜を突き破つて、生きた実在の姿に接近しようとする努力であらう。古代人の象徴の世界では美少年が花に変つたり、花が美女に変つたり、たえず生き生きとした *metamorphosis* が行われていたが、現代の人間の整理された象徴体系は、どんな花でも定型化し類型化し記号化してしまふ。こうした定型化の線に *direct* に沿つて描かれた花は、どんなに美しく彩られていても、われわれの眼は単なる花として整理してしまい、生命のあるものと感じない。美しければ美しいだけ生命のない白痴美としか感じられない。定型化の線を外ずして *oblique* にとらえられたものを見ると、われわれの眼は戸まどいしながらも何か生命を感じさせられる。つまり現代の整理された象徴膜に蔽われているわれわれの眼は、多少のデフォーメイションなしには生きた芸術というものが感じられなくなつていたのである。

三、象徴の非人間化

人に場所を教えるのに、言葉というよりも地図に描いた方がわかりやすい場合が多い。しかしこの道は「安全」であるとか、「危険」があるというようなことは、地図ではあらわせない。地図であらわすことの出来るのは現地に実在するものだけであり、「安全」とか「危険」とかいうものは現地にはないものだからである。たとえば「危険がある」といわれた道を行つて見ると、現地にあるものは落ちかかつた橋とか蓋のないマンホールといつたようなもので、これが「危険」の正体であつたことが判明する。即ち「危険」とは実在世界に対応するものを持たない、言葉の世界だけに存在する言語的虚構 (*linguistic fiction*) なのである。同様に「自由」とか「平和」というのも、それを聞いて

実体の表象の浮んで来ない言葉である。コンクリートの女神像や葉のついた小枝をくわえた鳩が浮んだとしても、誰もそんなもののために戦つたり死んだりしないだろう。しかし人は「自由」とか「平和」という言葉を実体のあるものと思つている。そして「平和のために戦え」といわれると、手出しもしない外国へ攻めこんで、平和の肝心の主体である善の人間が殺したり殺されたりする結果になつてしまふ。この言葉のからくりは何であらうか。

free man という言葉は附随性十実体で一つのものをあらわす。イエス・ペルセンのいう Junction で man が primary (一次語)、free が secondary (二次語) である。ところが「自由な人間」がどうかしたというのでなく人は生きてゐるが「人間の自由さ」がなくなつたというような場合、注意の焦点が実体から附随性に移る。すると人間の思考作用は本来一つのものを二つに分けて考えるようになる。これが言語形式にあらわれると、形容詞 free が実詞化されて freedom となり、free (II) man (I) が man's (II) freedom (I) となつて、所有関係をあらわす man's house と同じ形をとることになる。元来二つの「もの」を關係づけるとき、注意の焦点になるものが直格 (modus rectus) でとりえられ、他のものが斜格 (modus obliquus) の地位に押しやられるのは人間の思考の法則である。たとえば母と子があつて、母親の方を主題とするときは children's (II) mother (I) という形式をとり、子供の方を主題にするときは mother's (II) children (I) となる。しかし man's freedom を man's house や mother's children とくらべると、言語形式は同じでも現実の關係は全然ちがう。即ち人と家、母と子はいずれも二つのもので、人や母がいなくなつても家や子供は残るが、人と自由は実体十附随性の關係で、人という基体がなくなれば自由という附随性は残る筈がない。しかし附随性の方に焦点が集まると、実体の方は注意の外へおし出されてしまい、freedom が独立して、あたかも一個の実体であるかのような観を呈する。実体をはなれた虚構の実詞、これが抽象名詞というものだからである。

抽象名詞は実体のないものを実体があるように見せかけるところから、人はいわゆる言葉の魔術にかかつて前に述

べたような悲劇をおこしやすい。デマゴグがこれを意識的に使つて人々を自分に有利な心理状態へ持ちこもうとし、また別に為にしようという考のない人でも無意識にこれを使つて人を惑乱していることは、意味論者や論理学者のいつも指摘するところである。しかしそうした悪評にもかかわらず、抽象名詞は人間の思考を發展させていく上に欠くことの出来ない重要な言語手段である。ベントムは言語の虚構を最も鋭く分析した人であるが、抽象名詞について次のようにいつている。「実体のないものに実体のあるものと同じ着物をきせ同じレヴェルにおくという言語的工夫がなかつたら、動物言語以上のいかなる言語も存在し得なかつたであらう。」(Jeremy Bentham: *Theory of Fiction*, p. 16) たとえば人間は「明月」を問題にしている間は単に事物の外面性をなでまわしているにすぎない。しかし「明るさ」というものを月から切りはなして、それだけを対象にして考え、さらにそれから「光」を、「光」から「光波」を、「光波」から「波長」という風に、実体から附随性を、その附随性からまた附随性をとり出して追究していく思考方式は、事物の外面性から本質の内奥へ段々深く食いこんでいくことである。抽象名詞はこうした分析的思考の言語形式であり、その機能は次の例文における語のランクの移動を見れば明かになると思う。

- (1) He (I) moved (II) astonishingly (III) rapidly (II).
- (2) His (II) movements (I) were astonishingly (III) rapid (II).
- (3) The rapidity (I) of his movements (II) was astonishing (II).

この三つの文は内容は同じことであるが、主題の取り上げ方、即ち焦点のおきどころがちがうのである。(1)は「人間」が主題であるが、(2)では「動き」が主題となつて、動きの基体である人間がⅡにまわつている。(3)になると「速さ」が主題でⅠとなり、その基体である「動き」がⅡにまわつている。そして附随性である「動き」や「速さ」が主題に取り上げられるとき、動詞 moved (II) 形容詞 rapid (II) が movements (I), rapidity (I) と実詞化され、ベントムのいうように「実体のあるものと同じ着物をきせ同じレヴェルにおかれる。」逆に「人間」や「動き」が主

題から外ずされると主格から secondary の屬格にかわる。しかしこの屬格は二つのものを關係づける所有關係や目的關係でなく、いわゆる Subjective Genitive で、(3)の His movements は「彼が動いた」ことを意味し、(3)の The rapidity of his movements は「彼の動きが速かつた」ことを意味する。即ち(2)の movements は言語形式ではⅠであるが論理的な意味はⅡであり、(3)の rapidity は論理的にはⅢであり、主体である「人間」は論理的にはⅠでもある。してみると上の三つの例文は(1)だけが論理に合つた言語形式で、(2)(3)は論理に合わない虚構の言語形式ということになる。即ち論理的には「人間」(Ⅰ)があつて「動き」(Ⅱ)があり、動きがあつて「速さ」(Ⅲ)があるわけで、ベンタムの言葉でいえば movements は実体から「一步はなれた虚構的實在」(a fictitious entity of the first remove)、rapidity は「一步はなれた虚構的實在」(a fictitious entity of the second remove)とあぶ。

さて(3)のように rapidity を主題としたとき、これについて述べる great とか astonishing とかいう言葉は不確かな主観的な形容にすぎない。人間が「速さ」とか「熱さ」とか「冷たさ」とかを客観的な正確さであらわそうとすれば、これを何とかして分離量(discrete quantity)を示す「数」というものに換算するしか方法がない。たとえば湯が大へん熱いといつても、その人の手が冷たければ本当はあまり熱くなくかもしれない。そこで熱が物体をぼう張させるといふ原理を応用して水銀柱をつくり、これに度盛りを施して数に換算するという甚だまわりくどい方法をとる。数には感覚の錯誤や主観の歪みが入りこむ隙がない。この数量觀念以外の何ものもあらわさない、実在から最も遠ざかつた無色透明の抽象的記号が科学の最有力な武器であることはいふまでもあるまい。

人間の分析的思考が進み、実体から動きへ、動きから速さへという風に関心が移つていくにつれて、言語形式は具體名詞から抽象名詞へ、さらにより高度な抽象名詞から数詞へと移つていく。昔の東海道の旅は広重の絵巻や膝栗毛であらわされたが、今日の旅は時速何キロという「数」であらわされる。ギリシャのマラソンでは誰が早く決勝点に着くかという「人」が興味の中心であつたが、今日では人よりも記録の「数字」に関心が持たれる。速さは昔は実体

と結びついて視覚に訴えるものであつたが、科学技術はこれを実体から切りはなして、毎秒三十万キロメートルという感覚ではとらえられない電波の速さも、機械を使つて数字でとらえるようになった。今日人間の眼の科学技術における役割は機械と数字を見ることで、対象そのものを見ることではない。人間の視力は機械と数字によつて何百万倍に増幅される。それを持たない只の肉眼はいわば武器としての竹槍に類する。昔日本が貧乏国に似合わぬ海軍をもつていたころ、アメリカのように弾を濫費することが出来ないで、カンのよい水兵を猛訓練して百発百中の射撃の名人を多数養成していた。しかし太平洋戦争になると敵艦の姿がまだ見えないうちに水平線の彼方から弾が正確に飛んできて施す術もなく撃沈されてしまつた。敵の姿を見て射つ名人は、敵を見ずにレーダー装置にあらわれる数字を見て射つ現代のペルセウスにかなわなかつたのである。

昔の医者 は病人の顔色を見て病名を当てたというが、今日の医者 は患者の生理現象を様々な数字に換算したデータを見て診断を下す。昔の王は民の飢色を見て食糧の不足を知つたが、今日は何千万人の一年の消費量とその年の生産予想量とを比較して、不足量を正確な数字で知ることが出来る。昔なら数十年を要した複雑な計算も、今日の高速電算装置にかけると数秒で出来るようになった。これを使つて、あらゆる数字のデータから推計を行えば、景気の変動から政策の成否、戦争の勝敗まで確率的に予言出来るという。そうなると人間は数字のデータさえ集めておればよいわけで、いわゆる電子脳が人間の思考を代行する時代が来るかもしれない。操作よろしきを得れば、その方が今日の政治家の怪しい脳よりはるかに精巧で信頼がもてるかもしれない。

科学とは質を量に換算することだというが、日光でも台風でも、人間の生理現象でも、社会現象でも、要するにどんな対象でも、いくつかの抽象名詞(性質)に分析して数字であらわすのが科学的研究方法であろう。芸術の研究も単に感動を言葉で述べるだけでは「科学的」でないといわれる。近頃では声学家の歌つた歌を機械を使つてグラフや数字にあらわしたり、ある作家の全作品の語彙をいろんな角度から統計的にしらべ上げて、その作家の特徴を数字であ

らわすという科学的研究法が行われ出した。こうなると将来の文学研究者は高等数学を学び、計算器と対数表を使って詩や小説を読むことになるのかもしれない。

ローマ数字は指をたてに見た象形（ v は中の指三本を省略した片手をあらわし、 x は v を反対の方向に、上下に合わせたもの）漢字の一二三四五は指を横にして見た象形だという。対象物を自分の指に対応させて、やつと十ほど数えていた時代の人間は、人や物を眼で直かに見ていたのである。今日の人間は数の記号を通して人や物を見るようになった。マクス・ウェーバーは薄記を資本主義社会の象徴と見たが、この社会では毎期の決算のバランスシートにあらわれる黒字を常に増大していくようにするというのが至上命令で、人も物もすべてこの角度から見られる。数の記号を通して見ると、人間も自然も数量化した資源としか映らない。自然と人、人と人との間に昔のような親密な交感は通わなくなった。星一つ見るにも首の骨が折れそうな大都市の街にあるとき、ラッシュアワーの駅のホームに立っていると、われわれの眼にうつる人間は一樣に記号化された抽象的人間で、生きた人間としての印象をうけることは滅多にない。

戦争はもちろん物量の数であらわされる。T・S・エリオットの *Triumphal March* では無数の鷲の旗と華やかなラッパの吹奏のうちに、果てしもない物量の行進が続く。

5,800,000 rifles and carbines,

102,000 machine guns,

28,000 trench mortars,

53,000 field and heavy guns,

I cannot tell how many projectiles, mines and fuses,

13,000 aeroplanes,

24,000 aeroplane engines,

50,000 ammunition waggons,

now 55,000 army waggons,

11,000 field kitchens,

1,150 field bakeries

詩には珍しいこの数字の羅列は何か異様なものを感じさせるが、そこには気味悪くも兵士の姿は一人も見えない。指
令何号「本作戰に爆薬何噸兵力何万を投入」という調子で全部消費されてしまったのである。地図と数字しか見ない
作戰本部の軍人の眼は次のようなイメージを見ることがない。

Now come the virgins bearing urns, urns containing

Dust

Dust

Dust of dust

このように数字以外の何も見ないことに慣らされていつたら、しまいには人間はどんな精神状態に達するだろ
うか。

病人の顔色を見て病を治したり、民の飢色を見て倉を開いたりした非能率的な医者や王は、すべてを数に換算する
能率的な現代のペルセウスに取つて代られるのは必然であろう。同時にまた人間が自然の生きた表情を見て感動した
り、人間の顔に浮ぶ悲しみの表情を見て動かされたりする能力も段々失われていくことは不可避のように思われる。